

# ざいちのち

まちやむら、そこに住む人びと（＝ざいち）の、  
知恵や生き方（＝ち）から学び、実践する活動です。

写真：守山市開発集落の  
水田のアマサギ

京都大学  
生存基盤科学研究ユニット  
東南アジア研究所「在地と都市がつくる循環型社会再生のための実践型地域研究」・  
「ベンガル湾縁辺における自然災害との共生を目指した在地のネットワーク型国際共同研究」

## 守山フィールドステーション

### 機械化以前のコメ作り：田刈りからワラのしまつ 守山 FS 研究員 藤井美穂

滋賀県守山市洲本町開発（かいほつ）集落で生まれ育った A 氏（男性 1926 年生）から稲作について聞き書きを行っている。

穂がでてくると「穂水」（ほみず）を入れる。9 月のかかりころまで、田にチョロチョロと水を入れるんやな。そんで、花が咲き終わって穂がちょっと傾きかけると用水の水をとめるだけやな（A 氏 85 歳）

イネの穂が出てから約 40 日が経つ 10 月頃、日光によってイネにたまった秋の夜露が落ちる午前 10 時頃から日没まで家族全員で、秋日和の時に田刈り（稲刈り）をした。田刈りは 11 月中にすませた。田刈りカマ（ノコギリ鎌）を使い、5 株を 1 つかみにして刈った。2 つかみの株を「スベ」<sup>[1]</sup>でくくって 1 把にした。

脱穀は「イナゴキ」と呼ばれる。イナゴキをする場所が田の真ん中に作られた。

田の真ん中に太い竹を 4 本置く。竹の上にミザラ（丸竹をワラ縄で縛ってつくった簾。竹と竹の間は指 1 本がはいる。大きさ：4 m × 2 m）を 2 枚敷いて、その上に約 12 枚のムシロを敷いた。これを「座敷」とも言う。座敷では、「ツイネ」（後述）から脱穀、モミの選別までが行われた。

まず、この「座敷」に刈ったイネを、脱穀しやすいように集めて積んでおく「ツイネ」（積稲）が行われた。刈ったイネの株を外側に向けて穂をムシロの上におき、高さが約 1.5m になるまで、座敷の隅に沿って円の 4 分の 1 の弧の形になるように積み上げた。ツイネが下手な人は崩れないように木の突っ張りをしたが、翌日になると、穂の方にひっくりかえていた。

翌日、早朝 3 時に起きて、足踏み脱穀機をツイネの近くに置いてイナゴキをした。足踏み脱穀機を「イナゴキ」とも呼ぶ。足で踏み板を上下させると、山型の針金がついた「タマ」（円筒形のドラム）が回転した。そこにイネ束の穂を当て手で束を押さえると、モミが落ちた。人

が足踏みをする反対側は、モミが飛ばないようにホロをした。ホロは「タマ」に竹で屋根をして、その上に布をかぶせて被いをした。脱穀は 1 反につき、朝 3 時から 8 時までかかった。イナゴキをするとモミはワラ屑と一緒に落ちるので、女性が「トオシ」（ふるい）を使ってモミを選別した。トウシは藤（トウ）の網で作ってある。脱穀したモミをすくいにとって、両手でトウシを持ってふるう。モミは網の目から落ち、トウシの中にワラ屑が残る。トオシから落ちるモミはヒゲナシ（ワラ製で大きな鍋のような形をしており、持ち手が 2 つついている。写真 1 参照）で受けた。選別されたモミはカマス（ムシロを二つ折りにして作った大型の袋）に入れて、大八車で家に運んだ。モミの選別をして家に持ち帰るまでを「モミのしまつ」と言う。

イナゴキをしたワラは同じ方向にむかって田に投げられ、女性によって束ねられた。穂先を上に向けて 1 把のワラを 6 つまとめる。5～6 本のワラを抜いて穂先から 20cm のところをくくって 1 つにした。これを「チョッポイ」という。チョッポイを 2 つ合わせてワラでくくったのを 1 束といった（写真 2 参照）。この作業を「ワラのしまつ」と呼び、女性の仕事であった。

乾燥させたワラは、燃料、肥料、農具、生活用具の素材に利用された。そのために、「イナギ」と呼ばれる 4 段式の掛干しをしてワラを乾燥させたのである。

イナギについては、次のニューズレターで報告する。



写真 1：ヒゲナシを立体的に撮影できるように工夫している A 氏。  
写真 2：A 氏の納屋に保存されていたワラの 1 束。チョッポイが 2 つ束ねてあることが分かる。

[1] イナワラは、葉の部分の「ハカマ」、茎（幹）の部分である「カン」、「カン」の先端部とでもいえる脱穀された穂の部分の「ミゴ」の 3 つから成っている。通常、藁細工などにはワラの茎の部分のみが使われる。葉の部分である「ハカマ」はワラズグリと呼ばれる農具で茎から取り除かれる。「スベ」とは茎からはがされた「ハカマ」のことである。

## 小水力がひきだす地域の力

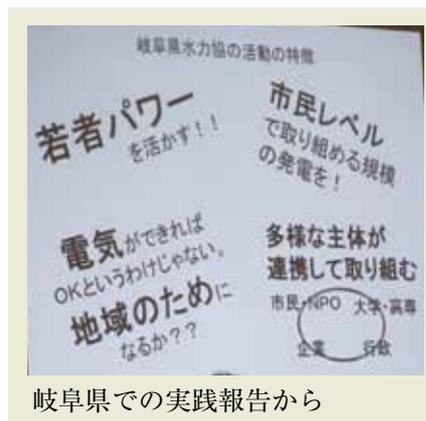
朽木 FS / 火野山ひろば 島上宗子

「関西でも小水力発電を！」と題したシンポジウムが、2012年4月14日（土）、京都駅前のキャンパスプラザで開催された。シンポジウムには関西はもとより、北陸、中国、四国、九州など西日本各地から200名あまりが参加した。その後の懇親会にも約70名が集う盛り上がりとなった。シンポジウム企画の中心となったのは古谷桂信さん（全国小水力利用推進協議会理事、高知小水力利用協議会事務局長、『地域の力で自然エネルギー！』の著者）だ。朽木 FS / 火野山ひろばで、古谷さんを招いての勉強会を数回開いたことが縁となり、今回のシンポジウムは東南アジア研究所実践型地域研究推進室も共催することになった。



「全国小水力利用推進協議会」が設立されたのが2005年である。以来、富山、山梨、長野、岐阜、熊本、群馬、岡山、富良野市、徳島、高知、鹿児島など各地で協議会が次々と設立されてきた。関西では、嵐山・渡月橋での小水力発電（2005年）をはじめ、先進的な取り組みがあるものの、協議会は設立されていない。今回のシンポジウムの趣旨は、協議会設立も視野にいれ、関西で小水力発電をさらに盛り上げることにあった。

シンポでは、小林久さん（茨城大学）による基調講演のほか、「再生可能エネルギーの固定価格買い取り制度」の現状報告や、富山、岡山、徳島、高知、岐阜、熊本、鹿児島など各地からの実践報告がなされた。印象的だったのは、取り組んでいる人々の多彩な顔ぶれだ。工業高校、高等専門学校の学生たちから、大学生、NPO、自営業、主婦、会社員、退職世代など。小水力がきっかけとなって、若者と年配者、ムラとマチ、素人と専門家、企業・行政・



大学・市民などがつながりあい、電気だけではなく、パワーを生み出していることが実感された。

翌15日は、古谷さんをはじめ、シンポ企画・準備に関わった

人々など20名あまりで、京都・滋賀で小水力発電の可能性のある現地を見て回った。京都市八瀬では、明治期に建設され昭和41年まで稼働していたという水力発電所跡を視察した。かつては京福電鉄の電力として使われていたらしい。山の急斜面にしがみつくように、上流部の取水口から2キロあまりにわたって水路がひかれている。水路には石や落ち葉や苔に覆われている箇所もあったが、復活させれば、発電のポテンシャルは高いらしい。滋賀の石田川や安曇川流域では、土地改良区の方々や地元の市議員さんの案内で田んぼの用水路での発電の可能性なども見て回った。普段何気なく目にしていない水路や川が、大きなポテンシャルを秘めた宝物に見えてくる。

田んぼの用水路などに置いて数十W（街灯をつける程度）を発電するものから、設備投資に数千万から億単位の費用がかかるが本格的な売電をめざす1000kW規模のものなど、小水力発電の規模にはかなりの幅がある。朽木 FS では溪流落差で1kWを水車発電し、水は山菜と茸づくりに、電気は獣害防止電気柵に使い、山の恵みの再生実験を目指している。

水車の設置が水の力を活かすだけでなく、人の力をつないでいくきっかけになれば、と思う。



## 京北町の元林業従事者の伐採作業に関する聞き取り 亀岡 FS 研究員 河原林 洋

田中利一さんの山仕事については「ざいちのち」です  
で簡単に述べた<sup>[1]</sup>。今回は、その山仕事における伐採  
手順を説明しながら、伐採の道具類について簡単に紹介  
したい。

伐採（主に杉材）の時期は、夏の土用から秋の彼岸ま  
で（7月中旬から9月中旬）であった。これは、木皮（こ  
わ）を剥ぎ、乾燥を促しながら、材質を保つために最適  
な時期と見なされていたからだという。

業者（又は山主）より杉の植林された山の伐採仕事の  
発注を受けた時には、最初に、伐採作業を受け持つ山を  
班員皆で見分をし、作業の難易度と班員の熟練度によっ  
て受け持つ伐採面積を各班員で割った<sup>[2][3]</sup>。伐採の仕事  
の初日には、必ず山の神<sup>[4]</sup>にじゃことお神酒をお供えし、  
安全祈願をした。

写真1は伐採と木の皮をむく道具類で、左から、大斧、  
矢（カマシ）、大鋸、手斧、シャゴカキ、ギリガマ（テ  
キガマ）、ヘラである。



写真1：伐採と木の皮をむく道具類

伐採作業は、山の斜面の上から始められる。立木に対  
し、倒したい方向（以下、伐倒方向）の反対側に大斧で  
追い口をこしらえる（図1-①）。次に大斧で伐倒方向側  
に受け口をこしらえる（図1-②）。この受け口が伐倒方  
向を決める。したがって重要な作業となる。追い口より  
大鋸で伐っていく（図1-③）。段々と切り口と大鋸が噛  
んでくるので、追い口に矢（くさび）を打ち、切り口を

開けながら伐り進め  
ていく。矢の打ち方  
が伐倒方向となるの  
で、慎重に打ち込ん  
でいく。皮むきの作  
業を容易にするため  
に、切り株やすでに  
伐倒した丸太の上部  
に伐倒することが理  
想である。隣接する  
立木と交錯しないよ



図1：伐採手順図

うにもしなければならず、思い通りの方向に伐倒するに  
は、5、6年の経験が必要であったという。伐倒の次は  
木皮むき作業である。皮むきは丸太の乾燥を促すため  
に行われる。杉皮自体が、屋根葺きなどに使われる商品  
であり、伐採賃金の賃金計算にも使われたので、木皮は  
大切に扱われた<sup>[5]</sup>。まず、伐倒した丸太の不用な枝を手斧  
で刈っていき、丸太の荒皮をとっていく。現在使われて  
いる皮むき器に似たシャゴカキを使う。荒皮の下の茶色  
の木皮が現れると、皮尺<sup>[6]</sup>で木皮を測り、この幅で木材  
周りをぐるりとギリガマで切り口を入れ、端から端まで  
一本切り込みを入れ、ヘラを差し込んで皮をむいていく。  
剥かれた木皮は、縦2尺1寸5分（約65cm）、横10間（約  
18m）分を一束として束ね、盗難防止と雨除けのために、  
伐倒した丸太の下に隠しておいた。そして随時、計量  
のため山から下ろしたそうだ。伐倒し、木皮を剥いだ状態  
で、約2ヶ月、乾燥して、玉切り（適正の長さに切り分  
ける）し、山からの搬出作業となる。

今回は木馬を中心に搬出作業について、道具類を紹介  
しながら述べてみたい。

[1][5] 実践型地域研究ニューズレター no.31 参照

[2] 請け負った山（伐採面積）を各班員であることを「山  
割り」や「杣割り」といった。

[3] 伐出労働は、7～10人で構成される班単位で行われ  
ていた。昭和38（1963）年当時、京北町・山国地区  
には約15組の班があった。（農政研究資料第505号、  
経済成長と農林業の構造変貌、第2部林業の現状と問  
題点、京都府農業会議、1965、p53 参照）

[4] 御神木。各谷ごとに御神木があったが、ない場合は  
山の入り口にお供えをした。

[6] 長さ2尺1寸5分の手製の櫛の棒

## 催しのご案内

### ■第46回 実践型地域研究 定例研究会

1. 日時 2012年5月25日(金) 17:00~19:00
2. 場所 滋賀県守山市守山1丁目10番2号「うの家」  
TEL/FAX 077-583-2366 (共通)
3. 発表

① 朽木FS 地域再生モデルの提案 —「ざいちのち」最終報告書を題材にして— 発表者 朽木FSのメンバー

### ②コメント 安藤和雄

—アジアの農村開発アプローチからみた朽木FSの取り組み—

### ③検討内容

朽木FSでの焼畑、草地や牛耕などの伝統農業の「再生実践」が示す実践型地域研究の特徴と意義について発表とコメントを題材に議論する。

★以上の催し物への参加ご希望の方は、

京都大学 東南アジア研究所 実践型地域研究推進室

担当: 安藤和雄 (ando@cseas.kyoto-u.ac.jp) までご連絡ください。

## 亀岡でのフィールド講義による 地域研究 (Area Studies) の楽しみ方事始 東南アジア研究所 安藤和雄

東南アジア研究所が中心となって発展させてきた地域研究のユニークさは文理融合にあると一般に信じられている(ウィキペディアの地域研究の項目を是非参照されたい)。自然と人が関わり相互に影響しながら地域に現れる個別の現象を成立させている。地域でおきている様々な現象の理解に文理融合を前提とした研究姿勢でのぞむことを私は大変納得できるし、誇れる研究理念だと思う。しかし、文理融合は学際的な共同研究においても、一人で行う個人研究においても困難さを伴う。「理」にしる「文」にしる、細分化した専門用語ないしは学術用語は多岐にわたり、それらを熟知し使いこなすことはよほどの勉強家でない限り無理である。文理融合を困難にしているのが、この専門的知識という学術の壁であるといえよう。また当然のことだが、現象を理解する能力と専門用語を知っていることとは異なる。しかし、案外このことを理解することは難しい。だから文理融合にとって専門性をいかに超越するかが絶えず問われつづけてきた。

このことを理解してもらいたいと願い、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科に入学してきた院生を主な対象者として、前期授業のある4月から7月の期間に月に一度、亀岡でのフィールド講義を有志の教員たちと合同で行っている。今年も第一回の亀岡の自然と農業のフィールド講義を4月27日に実施した。教員は私を含めて5名、院生は15名であった。

新入生の院生の多くは、私自身もそうであったように、草木に関する専門的知識である和名や学名、地形用語を知らない。したがって目の前にひろがる地域の器でもある自然的風景を描写するというしごく当たり前の文理融合の地域研究の土台づくりの作業に向かうと思考停止状態となる。

JR 亀岡駅の北口にデッキがある。そこに立つと別名「丹波富士」と呼ばれる牛松山を正面に、山の裾野には集落と、眼下には田んぼが一面に広がる。春の朝9時頃の景色はまさにその名にふさわしい。このデッキからの景観により亀岡の自然環境と集落の立地を「分析」し、体系的な「理論」として風景を描写することを行う。アジア・アフリカ地域研究研究科の地理学に詳しい大山修一さんが専門用語で、私が素人の言葉で、景観描写を掛け合い漫才風に院生に質問しながらすすめる。

「亀岡盆地の地形的特徴は亀岡断層にある」と大山さんが説明しても、ほとんどの院生はピンと来ない。牛松

山の裾野には北から南東方向に亀岡断層崖を明確に見つけることができる。しかし、断層が亀岡盆地の特徴だと言われても、専門知識のない者にとってはなかなかとつきにくい。すかさず「地域研究は専門用語を用いずまずは説明してみるのだ」と大山さんの説明に横槍を入れる。目に見えるところからはじめる。これが私が学んだ地域研究の方法である。「木の名前は知らなくても濃い緑と薄い緑の分布はわかる。濃い緑があるところはどこだろうか?」「そう、谷だ。谷は緑が濃い。濃い緑の木々は谷を好んで生育していることが分かる。遠くからでは判定は困難だが、濃い緑は植林で、ヒノキもあるがスギが多い。常緑樹なので濃い緑に見える。なぜスギが谷筋に多いのか? 谷筋は肥えた山土がたまり易い。スギは湿気と肥沃な土を好むので谷筋の植林が多いのではないか」という説明を思いつく。薄い緑は落葉樹のコナラやクヌギなどの木だろう。春の新緑なのだ。皆に馴染みのある山、谷、尾根、川、田、畑、木、常緑、落葉、新緑の一般用語からでも考えることはできる」と院生に投げかける。「集落はどこに立地しているのか? そう、緑の濃い谷筋下部の山麓に集落が扇状に点々としている。牛松山の尾根のシルエットを見てほしい。ちょうど集落が立地するあたりで、傾斜角度が小さくなっている。水は急傾斜から緩傾斜に変わる地点では一時的にたまり易い。事実、こうしたところでは湧水など地下水が得やすい。だから古くから集落の立地として適していたのだろう。専門用語を知らなくても、風景の各要素を常識的な知識で組み合わせ関連づけていけば“自分だけの理論”は思い浮かぶ。自分の言葉で自分の頭で考えることが楽しい」と説く。「理論」をつくり現場を理解していくことを楽しむこと、「専門家」に対して「理論」を専門用語で精緻化して発表することは異なる作業である。せっかく地域研究の大学院に入学してきてくれた院生達である。フィールドの現場で、目に飛び込んでくる風景をしっかりと見て、現地の人から聞き得たデータで考え、まずは現場で「理論化」することで自由に対象に迫る。是非、こうした地域研究の楽しみ方を自分のものにしてほしいと願っている。それが文理融合の地域研究の事始ともなる。



曾我谷川からみた牛松山  
(2012年4月安藤撮影)